



Title	East Goes Westにおける東洋の西洋化：植民地主義と民族主義の間で
Author(s)	松本, ユキ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2011, 2010, p. 47-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

East Goes West における東洋の西洋化

——植民地主義と民族主義の間で——

松 本 ユ キ

1. はじめに

Younghill Kang (1903-1972) は、自伝的フィクション *East Goes West: The Making of an Oriental Yankee* (1937) において、自らが経験した「東洋」から「西洋」への越境の物語を綴っている。物語の主人公となる Chungpa Han は、著者自身の分身とも言える人物であり、Kang と同様に、1921 年にアメリカへ到着する。

Kang は、カナダを経由してアメリカへとやって来た朝鮮系移民の一人であった。1924 年には、移民割り当て法（排日移民法）により、以後、アジアからの移民が制限されることになるが、Kang は運よくその三年前にアメリカにたどり着いた。*East Goes West* において、長い船旅を経てニューヨークへ辿り着いた主人公 Han は、日本の植民地支配により故国を喪失したことが原因でアメリカへやってきたと述べている。以下では、まず朝鮮人のアメリカへの移住が日本による朝鮮の植民地支配とどのように関わっていたのかを見ることにする。

朝鮮人のアメリカへの移民は二十世紀初頭に本格的に始まり、1903 年からの三年間で、およそ七千人の朝鮮人がハワイへ移り住んだとされる。後にこの七千人のうち、約千人が母国へ戻り、その他にも千人ほどがアメリカ本土へ渡っている (Chan 15)。

移住が始まってから二年後の 1905 年には、日本が日露戦争に勝利し、朝鮮を事実上、日本の保護国とした。以降、日本政府は朝鮮人のアメリカへの移民に否定的な態度を示すようになった。その理由は、朝鮮人よりも日本人を優先することで、アメリカでの日系人労働者との競争を防ぐためであり、朝鮮人がアメリカで独立運動を行なうことを懸念したためであったと考えられている。

そのような背景もあり、朝鮮からアメリカへの移民は日本や中国と比べると比較的少数であった。また、1905 年までは、経済的理由による労働者の移住が主だったが、1905 年から 1945 年の期間は政治的動機で移民する知識人が増えた。¹1910 年の日韓併合により故国

¹ 1905 年以降に移民した知識人たちは、中国、ヨーロッパを経由して、朝鮮の独立事情を考慮した特別措置により非公式にアメリカの許可を得るか、日本政府の発行した学生パスポートでアメリカの大学に留学するという二通りの方法でアメリカへ向かった (Lee 1991: 63-64)。

を喪失した朝鮮系の移民たちは、朝鮮を日本の植民地支配から解放するという目標を以前にも増して明確にするようになった (Lee 1991: 63)。

朝鮮系移民たちは、中国系や日系と比べると、自分たちの自立した経済やコミュニティーはなかったが、強い民族意識を持っていたと言われる。つまり、民族的連帯のための経済基盤には欠いていたが、別のコミュニティーの基盤があった。朝鮮での植民地主義に抵抗するという在米朝鮮人独自の「必要性」(Necessity)²があったのだ (Takaki 270)。

East Goes West の主人公である朝鮮系移民 Chungpa Han もまた日本の植民地主義から逃れるという「必要性」に迫られて、自分の居場所を探るためにアメリカへやって来るのだが、アメリカの社会で生きていくことを自ら選択しようと奮闘している。本稿では、植民地主義そして民族主義との関わりから、*East Goes West* において「東洋」の「西洋化」がどのように描かれているのかを考察したい。

2. 朝鮮における日本の植民地主義

Younghill Kang は、*East Goes West* よりも以前に書かれた別の自伝的作品 *The Grass Roof* (1931) において、自らの分身である主人公 Han がアメリカへとやって来る前の朝鮮での幼少時代を描いている。*The Grass Roof* によると、Han が生まれたのは、日本がロシアに対して宣戦布告し、朝鮮政府に対して満洲への道を使用する許可を申請した頃であった。その後も続く日本の軍事支配によって人々が混乱を経験していた時代に生まれ育った。

また、Han が生まれた年は、故郷の村が飢餓に苦しんだ年でもあり、人々は草の根を嚙んで飢えをしのぎとしていたという。このような政治的混乱と経済的困窮を経験した時期に、Han は朝鮮北部の Song-Dune-Chi という村にある藁葺き屋根の家で育った。

The Grass Roof というタイトルは、直接的には Han の故郷にある藁葺き屋根の家を指しているが、同時に Han が生まれた年に経験した飢えを象徴しているようにも思える。Han にとってのユートピアは、Chungpa という名が「山の緑」(Green-of-Mountain) を意味するように、緑に囲まれた農耕社会であったが、政治的混乱や経済的困窮によって今はもう失われてしまった場所として描かれている。

Han は学者の家系に生まれたため、詩人のおじや学者のおじから中国の古典や儒教の英才教育を受ける。しかし、時代は変わりつつあり、かつてのように勉学に勤しみ、ソウルへ行って学者になるという道は閉ざされてしまい、「西洋化」された教育を受ける必要に迫られるようになる。

Han は、学校で日本語を学び、日本を通じて「西洋」の知識を得るようになる。しかし、家族や村の人々は日本化する (Japanize) ことは退化する (degenerate) ことを意味するとし

² Takaki は「必要性」(Necessity) という言葉を様々な文脈で使用している。彼は、アジア系移民たちは、様々な「必要性」(Necessities) に迫られ、アメリカへ移住してきたと主張している。彼らは「経済的必要性」に強いられてアメリカへ押し出され、産業社会の発展に「必要不可欠な」労働力を満たすためにアメリカへ引きつけられた。しかし、それに加えて、アメリカへの移住は、自由や新たな生活 (Extravagance) を追求するためのものでもあったとしている (Takaki 472)。

て否定的であり、Han と周囲の人々の間には次第に溝が生じてくる。Han にとって「西洋化」とは、日本の軍事支配による故郷の喪失であり、その影響下で伝統的な教育との関わりを断たれ、祖先や父親に対抗する立場に置かれることを意味していた。

日本の学校で「西洋化」された教育を受けることは、祖先や父親だけでなく、Han 自身にとっても、抵抗感や落胆を感じさせるものであった。日本がアジアで支配的な位置を獲得したのはその急速な「西洋化」にあると Han は考えていたが、その内実は軍事化によるものにすぎず、日本の「西洋」に関する知識は表面的なものであるとしている。また中国と韓国が古い伝統文化を維持しているのに対して、日本はその「若さ」ゆえに、「西洋化」が容易であったと述べている。「西洋化」が「新しさ」ではなく「若さ」によるものであるとすることで、Han は「東洋」と「西洋」の対立だけでなく、世代間の対立でもあることを示している。

このように、*The Grass Roof* においては、縁に恵まれ、祖先との結びつきが深く、伝統的な学問を重んじていたかつての故郷の喪失が描かれている。日本による朝鮮の軍事支配を通じて、「西洋化」を経験した Han は東から西へ向かう。

続編にあたる *East Goes West* において、日本の植民地支配により伝統と近代化の間で板挟みの状態に陥った Han は、新たに根を下ろせる場所を求めてニューヨークにやって来たのだと語る。

The military position of Japan—intrenched in Korea in my own lifetime—forced me into dilemma: Scylla and Charybdis. I was caught between—on the one hand, the heart-broken death of the old traditions irrevocably smashed not by me but by Japan (and yet I seemed to the elders to be conspiring with Japanese)—and on the other hand the zealous summary glibness of Japan, fast-Westernizing, using the Western incantations to realize her ancient fury of spirit, which Korea had always felt encroaching, but had snubbed in a blind disdain. Korea, a small, provincial, old-fashioned Confucian nation, hopelessly trapped by a larger, expanding one, was called to get off the earth. Death summoned. (Kang 8)

Han は故郷もしくは伝統の喪失を「死」と表現しており、朝鮮の村から遠く隔たったニューヨークで新たな「個人」(Individual)³として生まれ変わることを希求する。一人の朝鮮人亡命者をニューヨークへと導いたのは、直接的には日本による植民地支配であるのだが、彼の東から西への越境は、地域レベルだけでなく世界的なレベルで新たな変化を引き起こすこととなった「東洋」の「西洋化」という大きな圧力と連動して生じたものであると考え

³ 自伝というジャンルにおいては、西洋の個人主義の中でしばしば自明とされてきた「個人」(Individual)の独自性や自律性が批判的に見直され、社会的な経験や言説の中で構築される「主体/主体性」(Subject/ Subjectivity)という用語が用いられるようになってきた (Smith and Watson 25)。Kang は、自伝という形式をとることで、西洋近代の産物とされる「個人」を別の視点からずらして、書き換えようと試みている。

られる。このことは、Han のアメリカの朝鮮人コミュニティにおける民族主義との関わりにおいても示されている。

3. アメリカにおける朝鮮の民族主義

朝鮮の村という共同体から切り離され、一人の「個人」としてアメリカで生きていくことを決意する Han だが、アメリカにおいても朝鮮人のコミュニティと関わりを持つことになる。前述したように、アメリカにおいて朝鮮の移民たちは、日本の植民地支配から祖国を解放するという共通の目的の下、強い民族主義的連帯を形成していた。時には、彼らの民族主義は祖国の解放のためには暴力も辞さないという過激な活動となる危険性を孕んでいた。

Han は、Mr. Lin という愛国主義者が、集会に出席していた Chinwan という人物を刀で切りつけた事件について、朝鮮人社会からは少し距離を置いて観察している。

Chinwan は、朝鮮の釜山に出自を持つが、日本で長い間過ごしており、日本政府で外交の仕事に携わっていた。彼は日本人とも朝鮮人とも友好的な関係を築いており、満洲で仕事をしていた時も多くの朝鮮人革命家の命を救っていた。

罪のない Chinwan に傷を負わせた Mr. Lin の行為は、朝鮮人のコミュニティにおいて、新聞や電報などのメディアを通じ、英雄的な行為として賞賛される。この事件に関する人々の議論は、日本という国への抵抗に終始している。Lin の行為を「偏狭なナショナリズム」とであると口にすることはできない雰囲気であり、個々人の付き合いの中で Chinwan がどんな人物であったかが顧みられることはない。

Han は Mr. Lin の行為は英雄的なものではなく、野蛮な行為であると批判するが、Mr. Lin は Chinwan に対して罪の呵責を感じていないばかりか、彼を一息に殺してしまえなかったことを後悔していると話す。Mr. Lin の考えるナショナリズムは、Han にとっては受け入れがたいものであり、彼をいっそう朝鮮から遠ざけ、朝鮮人のコミュニティにいても孤独を感じさせた。

But it was as if I saw Korea receding farther and farther from me. Lin failed to arouse my patriotism; he merely italicized my loneliness and lack of nationalist passion, my sense of uncomfortable exile even among my fellow countrymen, where the homeland was constantly before my eyes. The rebellious individualist in me could not accept his Asian arguments for that bloody attack. It seemed to me not only savage, but futile. (Kang 68-69)

Han は、祖国を喪失した朝鮮人たちが、祖国を取り戻すという「必要性」に迫られるがゆえに、アメリカにいてもなお狭い世界から抜け出そうとしないのだと感じる。また、ニューヨークというコスモポリタンな都市においても、外界とは隔たった狭い世界に安住している朝鮮のナショナリストたちが自分たちを「エグザイル」と考え、「移民」とすると

は考えていないことを批判的に捉えている (Kang 69)。

自分たちを「エグザイル」であると考えているアメリカの朝鮮人たちが、喪失した故国を取り戻そうと、朝鮮との結びつきをより強く保っているのに対して、Han は祖国との結びつきを断ち、アメリカで生きる個人の人間性を見つめようとしている。「身体的にはエグザイルでも精神的にはそうでない典型的な朝鮮人」(Kang 54) としてナショナリストを批判することで、精神の面でもエグザイルとなる必要があるのだと主張している。

このような Han の立ち位置は、著者である Younghill Kang のアジア系アメリカ文学における位置づけとも重なってくる。アジア系アメリカ研究者である Elaine Kim は、Kang は一時滞在者ではなくハイフンつきアメリカ人の先駆けとして捉えることができるとしている。初期のアジア系アメリカ作家は、自らを客人もしくは一時滞在者として位置づける傾向があり、いつかは故国へ帰ることを前提としている場合が多かったとされているが、Kim はこのような一連の作家たちを「親善大使」(Ambassadors of Goodwill) という言葉で形容している。一方で、故国である朝鮮を喪失してしまった Kang はアメリカへの永住の意志が強く、アメリカ社会での自分の居場所を探し求める移民としての側面を持ち合わせていると論じている。

Although he remained unable to fully analyze the significance of his American odyssey, Kang's books remain valuable documents of an almost totally lost experience. He does not speak for Asians in America or even for most Korean immigrants at his own time. But his books contain a bit of the collective experience of the thousands of Asian men who worked as domestics, waiters, and cooks and who studied at American colleges or became objects of American missionary efforts. Chiefly, they give us the affecting testimony of one Korean's journey in search of the heart of America. (Kim 43)

確かに Kim は、Kang 自身が両班の出身であり、彼の作品にエリート主義的傾向が見られることに留意してはいるが、彼がアメリカで様々な職業に従事したことに触れることで、その時代を生きたアジア系移民の証言としての側面を高く評価している。

個人の物語を集団的経験としてしまえば、Han が批判していた「偏狭なナショナリズム」と同じ弊害に陥ってしまうことになるだろう。それよりもむしろ、Kang は、Han と朝鮮のナショナリズムとの関係を通じて、「民族」⁴という排他的な集合体に安住するのではなく、それぞれの空間や時間、人間との関係性のなかで、流動的に形成される多様性に目を向けている。しかしながら、Kim の指摘するように、Han は「個人」として物語を語ってはいるが、様々な人々との関係性を通じて自己を形成しており、そこにはアメリカ社会で生きる

⁴ 「民族」という言葉は、「民」(「人々」を意味する)と「族」(「氏族」「部族」「家族」を示す)という古代の漢字が結びついてできた比較的新しい語彙であるが、二つの漢字の結合により、この語句の新しさが曖昧にされ、過去の語源を示唆するようになった(シュミット 146)。

様々な人々の姿が反映されていると言えるだろう。

4. 二つの帝国：イギリスとアメリカ

1895 年の日清戦争終結から 1919 年にかけては、清朝中国の勢力が後退し、日本の帝国主義が台頭した時期であり、朝鮮は時期的にも物理的にも二つの帝国の間に位置していた（シュミット 2）。中国というかつての大国とアジアで急速に成長した日本という新たな大国との力関係の中で、朝鮮は近代を経験したのだ。 *East Goes West* において、このような「東洋」における中国／朝鮮／日本の地理的、時間的關係性は、「西洋」においても、イギリス／カナダ／アメリカの關係性によってあらわされている。

大学進学のために、ニューヨークからカナダのノヴァ・スコシアへやって来た Han は、イギリスの影響がその土地に色濃く残っていることを感じ取る。ノヴァ・スコシアは数多くの領土争いの歴史を経験してきた土地であり、その州都ハリファックスは、十八世紀半ばにイギリス海軍の漁港として栄えた。

アメリカ独立戦争後は多くの王党派がこの地に移住してきたことにより、イギリス系が多数を占めることとなったが、その後も第二次英米戦争（1812 年戦争）や南北戦争の影響下で、政治的経済的な発展を遂げてきた。Han が学生時代を過ごしたノヴァ・スコシアはイギリスとアメリカという二つの帝国の力学の中で繁栄した土地であり、アメリカという帝国に先立つ大英帝国の名残を留めた場所であった。

Han は、ノヴァ・スコシアの大学で英文学を学ぶが、大学教育においてもアメリカとイギリスの対立の歴史を刷り込まれる。キプリング最員の教授 Doctor Donald は、アメリカの大学教育をかなり意識的しており、アメリカに対するイギリスの優位性について常に学生に語っていた。Han は Doctor Donald のイギリス人としての誇りがアメリカに先立つ大英帝国の遺産にあることを指摘している。

To him, American colonization was the result of English enterprise; the oceanic highway was initiated and made safe during the seventeenth and eighteenth centuries owing to bold English expansion of commerce; and with Queen Victoria and the industrial revolution, then truly was the Empire most glorious of all, extending far and near, with spiderlike steel nets of communication covering the surface of all the earth. (Kang 100)

このような、ノヴァ・スコシアの大学で感じたイギリス中心主義を受けて、Han はやや皮肉まじりに、自らのカナダでの滞在を、「19 世紀、ヴィクトリア朝時代の大英帝国での一時滞在」（Kang 118）であったと形容している。アメリカの朝鮮人社会の民族主義の中で感じたのと同じように、カナダの保守的な「イギリス性」の中にも、Han は自分の居場所を見出すことができずに疎外感を感じる。

「民族」や「国民性」による集団的なアイデンティティは、どこにいてもその人の帰属

意識を揺るがすことのない芯の強さを与えてくれるものであるかもしれないが、Han はどこでもいつでも変わらない本質的な集団性には懐疑的であり、「個人」の多様性や流動性を排除する排他的な側面があることを見抜いている。そのことは、彼が日本による植民地化や「東洋」と「西洋」の緊張関係、アジア、ヨーロッパの双方における隣国同士の権力関係を自分自身の移住の経験によって学び取っていたことと無関係ではないだろう。

Han はフィラデルフィアのデパートで働いていた際に、留学生を支援しているクエーカー教徒の婦人 Miss Churchill と知り合う。彼女の姪は日本人と結婚していたが、彼女自身も慈善活動に熱心で、排斥法のもとで厳しい立場にあった日本人の学者に資金支援するなどの活動に従事していた。彼女はよく留学生を家に招待していたが、Han はそこで日本人留学生 Miyamori、そしてインド人留学生 Senzar と意見を交換する。

アメリカの文明化に対して楽観的な見方をしていた日本人留学生の Miyamori は、故国喪失者である Han が羨ましいと言い、全てが野蛮で原始的なところには二度と帰らないようにと助言する。何の疑いもなく「西洋」の文明を評価し、「東洋」を野蛮であるとする彼は、文明化の論理をそのまま取り込んでいると言えるだろう。また、Han に対して無自覚に朝鮮の植民地支配について話す Miyamori は、植民者側の論理を一方的に被植民者側に押し付けている。Miyamori は徐々に Miss Churchill からの招待を受けなくなる。

インド人留学生 Senzar については、Miss Churchill 主催でイギリス人の俳優を招待したパーティーで起こった騒動を紹介している。Senzar は、Han 曰く「インドとオックスフォードの産物」(Kang 296) であり、アメリカの大学で工学を学んでいた。Senzar はアメリカの大学の学生は教養がなく、オックスフォードと比べると劣っていると述べ、Han に対しても Han のアメリカ英語は彼のイギリス英語に劣るものであると言う。Han は、彼が「イギリスの大学生が感じているイギリスの優越感を無意識にパロディー化している」(Kang 297) と観察する。

この Senzar の発言を聞いて心中穏やかでなかったのは、アメリカに対する親善的な態度を示そうとやって来たイギリス人の来客だった。オックスフォード出身のイギリス人の俳優はアメリカに好意的な発言をし、自国を批判することで Senzar の意見を撤回させようとするが、逆に Senzar に反論されてしまう。

Why do you speak these lies? Englishmen are hypocrites. Englishmen despise all others but themselves. They are the most conceited and boastful race. They despise Americans even more than Hindus. I know, for I have heard them speak. But the English don't speak this before Americans. Liars, crooks, hypocrites, devils! O what people you English are. (Kang 298)

Senzar はありとあらゆる言葉を駆使して、英国人の偽善的な態度を批判する。このあまりにも明け透けな発言によって、異国間の社交の場が、たちまち人種差別を糾弾する場へと変化してしまう。

周囲からの批判的な視線にさらされた Senzar に、Han は「日本の植民地支配に比べたら、イギリスに支配されているインドの方がましだ」(Kang 299) と話し、自分の問題を引き合いにだすことで彼の怒りをそらそうとする。Senzar が帰ってしまうと Han は周囲の人々に同情され、Senzar は二度と Miss Churchill の招待を受けることはなかったが、Han は定期的に招待されるようになった。結果的に Miyamori や Senzar とは違った立場をとった Han だけが、「親善大使」として成功を収めたのだ。

Han によるこれらの二人の留学生の描き方は非常にステレオタイプ的である。日本人留学生 Miyamori は「西洋」(日本) の「東洋」(朝鮮) に対する優位性をインド人留学生 Senzar は「イギリス」(南アジア) の「アメリカ」(東アジア) に対する優位性を内面化する人物として描写されている。しかしながら、Han によるステレオタイプ的な描写をただ批判するよりは、これらのステレオタイプを用いることでどのような問題が浮き彫りにされているのかを突き詰めることのほうがより生産的だろう。

二人の留学生たちの「西洋」に対する意見は、あまりにも極端で受け入れがたいものであるかもしれないが、完全には否定できない部分もある。東洋人留学生にとって、これらのステレオタイプは常に身近にあるものだが、「西洋人」にとってみれば、口にするのものはかられることであり、自分たちとは関係のない問題として、実際には心を開くのではなく、閉ざすことで寛容な態度を示そうとする。このようなステレオタイプ化は、「西洋」の型にはまっていく自分、人種のステレオタイプにはめられていく自分の姿と重なってくる。東洋人留学生の姿は Han 自身の姿そして更には著者である Kang にも跳ね返ってくるのだ。ステレオタイプは、単純化された平板な人物像を作り出すという危険性を孕むが、そのことにより、「東洋」の「西洋化」というプロセスの中に巻き込まれ、植民地主義と民族主義の間で揺れ動く、様々な人物像が提示されている。

しかしながら、Han は、Miyamori の文明化に対する楽観的な見方や Senzar の狂信的な愛国主義とは袂を分かっている。Han はどこにも属せないあるいは属さないまま、常に移動し続け変化を経験しながら、「個人」として物語を語ろうとしているのだ。

5. まとめ

Younghill Kang の *East Goes West* は、主にアメリカのニューヨークを舞台としているが、一人の朝鮮人移民 Han の空間的、時間的移動により、「東洋」の「西洋化」をめぐる様々な力関係が絡み合っていることを明らかにしている。

主人公の Han は日本による植民地支配が原因で故郷の共同体との繋がりを断たれ、朝鮮を去るが、アメリカにおいても民族的連帯を維持している朝鮮人のコミュニティーに馴染めずにいる。さらに学業のために、カナダへ渡る Han だが、そこでもまたイギリスの「国民性」を誇示した大学教育を刷り込まれ、孤独に陥る。

世界的な規模で広がりを見せた植民地主義によりもたらされた「民族」や「国民性」といった議論の活発化は、国境を越えた集団的なアイデンティティの形成を推し進めたが、

一方で「個人」の流動性や多様性を排除してしまうという側面もあった。

また、二人の東洋人留学生の「西洋化」に対する態度はそれぞれの政治的文化的背景により異なっていたが、Han はどちらの立場にも同一化することはない。

East Goes West において、「東洋」の「西洋化」は、時間、空間、他者との関係性によって常に変化する流動的なプロセスであり、相互変容を伴うものとして捉えられている。Han は二つの世界の間で揺れ動きながら、「個人」として語ろうとしている。

朝鮮にいる家族の死や離散、朝鮮における政治的な混乱により物理的に朝鮮への帰国は難しくなり、「西洋」の型にはまってしまった自分は、精神的にも心からの帰国は望めないと語る Han は、朝鮮へ戻ってもアメリカからのエグザイルとなってしまうであろうことを予期している (Kang 367-368)。朝鮮にもアメリカにも根を下ろすことができないエグザイルのまま、Han は「東洋」と「西洋」の間を彷徨い続け、常に自分を作り変えているのだ。

参考文献

- Chan, Sucheng. *Asian Americans: An Interpretive History*. Detroit: Twayne Publishers, 1991.
- Kang, Younghill. *East Goes West: The Making of an Oriental Yankee*. 1937. New York: Kaya Press, 2006.
- Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple University Press, 1982.
- Knadler, Stephen. "Unacquiring Negrophobia: Younghill Kang and Cosmopolitan Resistance to the Black and White Logic of Naturalization." Keith Lawrence and Floyd Cheung, eds. *Recovered Legacies: Authority and Identity in Early Asian American Literature*. Philadelphia: Temple University Press, 2005: 98-119.
- Lee, A. Robert. "Younghill Kang." Deborah L. Madsen, ed. *Asian American Writers*. Detroit: Thomson Gale, 2005: 159-62.
- Lee, Kyhan. "Younghill Kang and the Genesis of Korean-American Literature." *Korea Journal*, 1991 (Winter 31-4): 63-78.
- Oh, Seiwoong. "Younghill Kang." Guiyou Huang, ed. *Asian American Autobiographers: A Bio-Bibliographical Critical Sourcebook*. Westport: Greenwood Press, 2001: 149-158.
- Palumbo-Liu, David. *Asian/American: Historical Crossings of a Racial Frontier*. Stanford: Stanford University Press, 1999.
- Sidonie Smith and Julia Watson. *Reading Autobiography: A Guide for Interpreting Life Narratives*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2001.
- Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Updated and Revised Edition. Boston: Back Bay Books, 1998.

Younghill Kang and Mirok Li. *The Grass Roof and The Yalu Flows*. 1965. New York: Norton, 1975.

アンドレ・シュミット著 糟谷憲一他訳『帝国のはざまで：朝鮮近代とナショナリズム』
名古屋大学出版会 2002.